

中等教育
國文讀本

訂正

一

15
241

東京圖書館			
四	二	一	
	四	五	
冊	號	架	函類門

081631-001-5

15-241

国文讀本

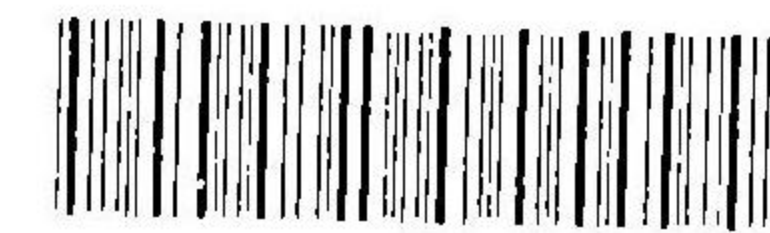
橋本 光秋

小田 清雄 / 編

卷1

M26

DAC-6414



橋本光秋
小田清雄
先生編纂
卷一

中等
教育
國文讀本

版權所有
教育書房藏

この國文讀本

橋本光秋

言文の道はあまの星

よこのついでにおひれ

らしむるあまの星

はたのふたあまの星

よき一巻のふたあまの星

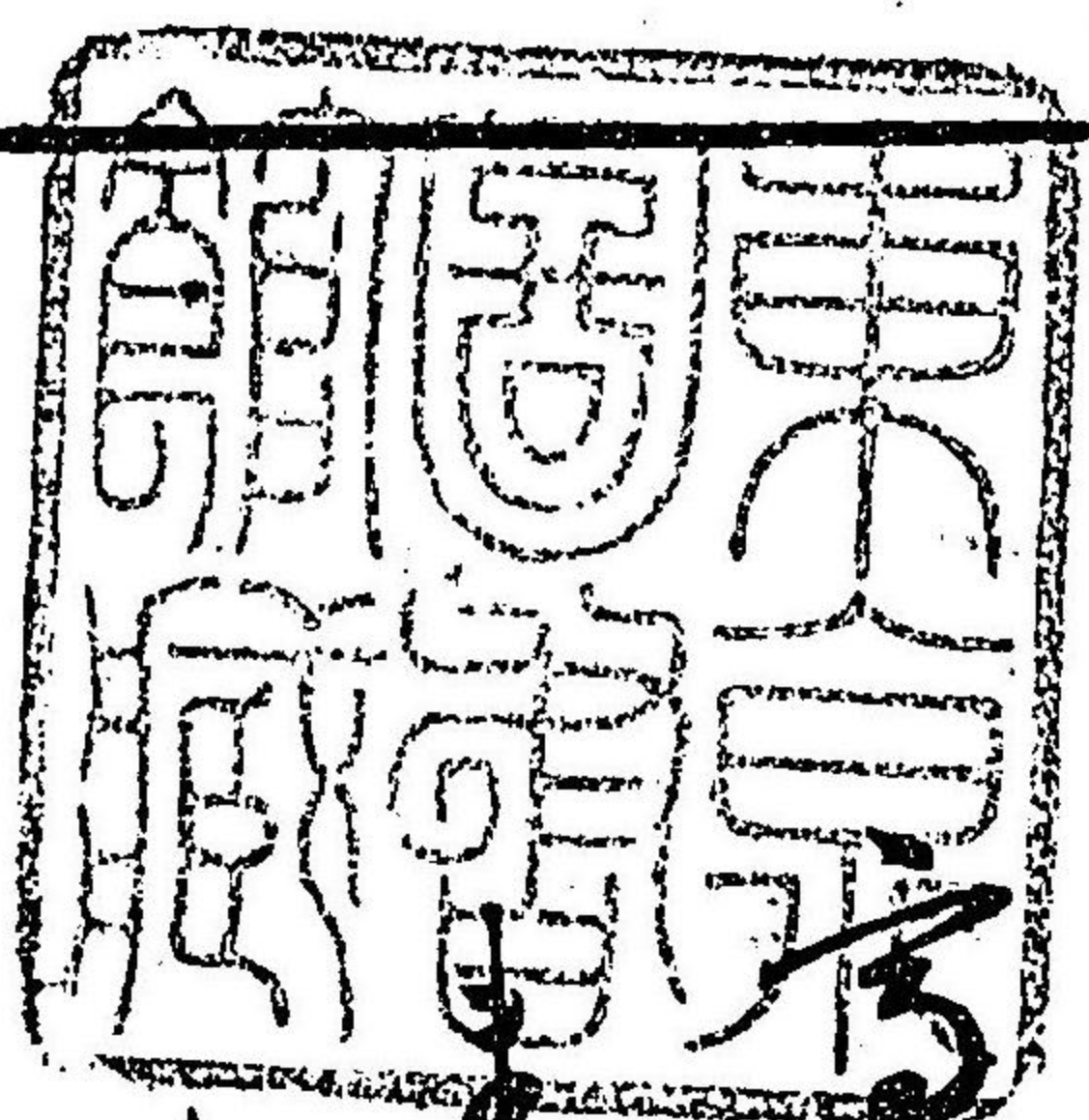
橋本光秋
小田清雄先生編纂 卷一

中等
教育
國文讀本

版權所有 教育書房藏

この國文讀本

橋本光秋



此の國文讀本は
橋本光秋先生の
遺稿を基として
小田清雄先生が
編纂されたもので
その内容は大変
充実している
と云ふことが
この本を通じて
よく分るであらう

こゝろをゆるぎなきまの書の

著と

美野 静

こゝろをゆるぎなきまの書の

著と

たのむまの書の

著と

國文讀本凡例

一本書は高等小學科を卒業したる人ほどの子女にして國文を修めんと欲するものため
に編せり

一文章は其難易を計りて配置せり第一冊より
次冊に漸次皆より繁ふ易よる難に第四冊よ
至りて中等教育を卒業すべき程度に編せり

一部門を分るべし其故を文章の難易を部門の真
實に伴もざれを也然れども各冊中に収めたる
文章は成るべく事實に相近きものを配置

一たりしれ事實を記騰するに便宜あり
めんよあり

一文章中假名づりひと語格文法とを誤りたる
を正したれを讀者其原書と異なる事あるを
咎むる事なれ

一文係結段落等の印を施されら乃文法
を總て教授者ふ一任にそを教を受けんも乃
の其法格を語記せんに妨あれをなすも
も讀も務をわぬには点施され

明治廿四年十二月

編者ら謹言

國文讀本第一冊目錄

- 一もの、上手
- 一鑑音をまゝて名綴を察す
- 一人乃事いんより肱あわれとせ
- 一人此より見と教より存ほせ
- 一いそがむすをれ
- 一棒ほどれねの針ほどかき
- 一菓子乃名此半皮、犬皮、羊肝
- 一ごんご
- 一牛乳

一 籟と真黒と乃同異

一 斗鶴

一 和泉の和乃字比支

一 城をしろといへる事

一 女の眉そる事

一 郭巨が黄金の釜を金乃釜ふあらず

一 坊主といふ称

一 諸國毎家の佛舎

一 苗字と字と一字づゝ呼ぶ

一 畿内

一 小笠原崎新をり乃記

一 関東、関西、坂東、山東、吾孀

一 國里乃名に唱と字と異なるもの

一 和泉國の久米田池

一 一日ふ二食

一 古の男女、玉鈴を身乃飾とせし事

一 慈猪

一 孝猪

一 熊人語をふに

一 勢を此相偶の首をたもつ

一 武勇淨海

一 山陵論

一 仁徳帝の涉叢

一 九條廢帝

一 平城天皇の御名

一 獲王大明神の夏績

一 高尾山和氣社勸進帖の序

一 菟公比射術

一 林道春史記を序す

一 文曼西行を畏づ

一 二人乃清民

一 鄙賤を忘れぬ

一 富女が友愛の誠強盗を感ぜしむ

一 妓王妓女乃遺勲

一 義夫血を碎く

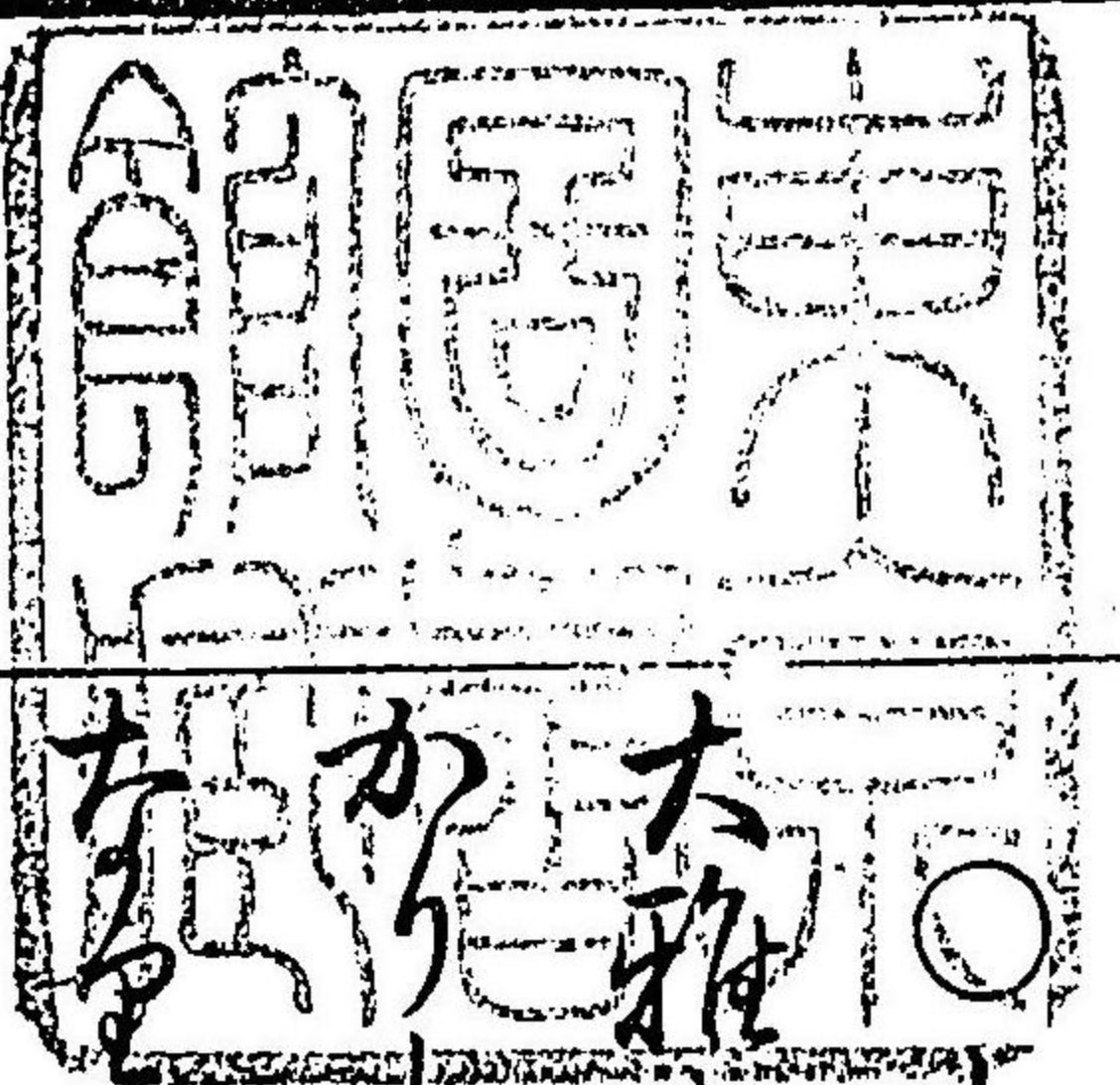
一 西國ふ影さし、柝

以上

國文讀本第一冊

橋本光秋 同編
小田清雄

富士谷清枝



○ものゝ上ゆき 地等
大雅をいひし人、近頃書畫をりて、
かりし時、三弦をこけぬるあまや、
なりし安永檢校といふ替考、
とト居して、日々人々ふを、
哉やられきある時、安永が歌に、
更に、近頃ふト居たるより、
を告げ、一曲を乃

どむ安永は志の熟なり哉感してやがて、
 けしにあり、三弦をけし、
 せき、
 やうくつけ、
 全き、
 らぬ、
 と問ふ、
 とい、
 大雅、
 たりと、

かでの繪、
 どつ、
 やい、
 弦に、
 あし、
 撥、
 左、
 いま、
 其、
 さ、

おのふが故なりやといひき大雅いといふ感懐
悔ふふかく恩を謝してかへりて後陰にふり
く心やいふたりけんつに世よゆきけり一家
をねとて道しりきこれひとに安永檢校が恩よく
やがてわが陰乃師なりとたに自らいはききと
大雅にうらけかへり本間某これをうらき
まけりなきわがといひてをきけり
まけり人乃耳目これねもぬ所にも精神のみ
ちり此物がらもけりわが涕よふに要哉
得たりといはんにいふらうまをんにいふ

あんにいふ物よまんもたぐ耳目乃れよぶを
此みの物なりと心得なきお此安永檢校に
まんか

○鑑音を聴きて名鑑校室
槐陰 雜記

福田頼茂

子子村正は世よ名高き鑑治有りもとは田舎に
謙鑑治を重しぐ或時正宗を此所を經歷するに
と阿る民家ふもどなりぬ鑑音の聞ゆ怪みそ
乃名鑑問ふに村正やいふ鑑治有りといふ正宗
深く嘆どるかふる山中此民家に此人物あり事

をとり即ち其家に入りて彼が難地見るづゝを習
練せしかやとふ。村正もとり土人をればさ
むくつけなる返答も何乃為に尋ねらるるか
とりふ。正宗我を正宗とりふ。難治なり。汝の難言
此も亦さぬによつて。あま来りて。尋ねるら
見るなりといふ。さきか。に正宗が事ハ岡及び居
たま。にや。依に敬伏し。師やせん子をこふ。正
宗諾して。を。是より。村正を純粹乃。弟子と。し。可
可哉。傳へ。後世。正宗に。ま。ふ。名。難治。と。る。せ。り。と
ら。や。正宗。村正。の。難言。此。も。亦。さ。ぬ。を。聞。き。し。

ア。一。も。實に。其。業に。精。ま。き。妙。所。なり。

○人乃あといけんよりひぢらあねとせ（後流の）

藤井高尚

友のまゝわれ妻がらりにおきう。にげよ人のうへ
ををんはけいみどう。何く。いふ。人あり。けさ。さ
が。ま。き。し。り。う。ご。を。ま。き。は。え。た。う。ん。人。は。ら
た。う。ぎ。う。ん。や。は。し。あ。い。し。ふ。ま。の。み。づ。う。れ
う。い。し。こ。い。し。あ。ま。の。い。れ。た。い。し。つ。あ。ま。ま。い。人。乃
し。た。あ。な。を。し。く。た。の。ひ。を。し。ん。を。い。し。は。づ。い。し
ま。し。あ。ま。な。し。し。ま。い。

かくきんはさうりなりとぞのがつとむ
づまひさ哉よくはとめづひになり得んを
すまひびれよきまぢれ志をわがふにまげ
めよりあつぎを高くたまにたそむ
乃かこまき人と人趣とねる人なれをよ
とめとんはいよらづれ人にまぢれま
し得んそのなをとおひはげみくつとむ
志すれをほごねになりうらあや
我をならつとまをれつとめと人な
ふにふえせとまどくおひくづを
人の涼

山乃谷れうとれ木の世に
しきまぐちけさぬ
塵し。

○菓子此名の牛皮犬皮羊肝 善庵 随筆 朝川善庵

菓子に名づくる牛の皮に似たれをとく牛皮とい
ひ犬乃皮に似たれをとく犬皮といひ羊の肝ふ
似たればやそ羊肝といふ古人此純素樸率思ひ
やまづ後人此物忌む心より文字此不潔
なる哉嫌ひ牛皮を求肥。

石川丈山翁の北山紀聞卷一、待敷に云をく京
より到来とく牛皮飴の篋をよげりし出

華人ありしが、幾許か待賤の阿らんが、東域に在り
未だ待をまじふべし、何さま案じて見るべしや、
一笑しぬ、私乃云なく、半皮此字をば、
来求肥とかく位どは、待をまじふべし、
つば、翁、結とたりとあり。

犬皮を研皮、

筆のすきみ巻上よ云なく、松風といふ菓子
五山此僧侶も犬皮と唱ふ、半皮にむしりて名
あり、
人云なく、見肥の字にか、
羊肝を羊羹と音を假し、文字を易し、
ふに至る。

附、犬皮を松風と名づくるわけを、橘庵漫筆巻
四に云なく、干菓子の松風を、初め、京都より製
し出、或御方へ御銘を乞奉り、
て松風と稱け、其心は表に火に剛く焦
げ、
乃斐阿れど、
しき義によりて、松風や、名附け、
○ダンゴ 随筆々々

石原正明

米の粉を粘ネしてずらめてむしるを世にダン
ゴやぞいふなる。團子といふ字かゝ書に見はて、
同ドさまある物と見ゆまど音訓よりなれば、
これよりいふる名にもあらずバ種は唐菓子と
いふ中は團子よりいふまにやゆらん。今團子
乃形を思ふに米は粉は胡麻をすく粘して丸
くしるを此也。白き菓子相まかりたるが基よ
似これに團基といふものなるを漢書よよみる
して好字に書改めて團基といふやあらん。尺
素は米よ基子麩といふと此見ゆらん。これを俣

勢尾張本どいへた。今と調ぶる物も湯餅は胡
麻をいまよりこれら穀をてねひよれるるを
りきて今のダンゴに胡麻をいれざるまど、これを
省けるに代をさるすふうつまなるなり。此考お
ほに遠よや。

○牛乳 寄居 秋徳

近藤芳樹

今、世に仍はる種痘といふ言の寛政此は後、英
吉利よげど免る行ひよりをさるにたとえり紅
毛よりはるつねど用ゐる人なり。此に赤永れ
酒のやまの夷乃エヒノをさるたりたるより

わが長門國防はて肥前をどけうをどめく
やうく天の下よひらまりにけり備中此あり
乃殿人緒方章とく今ハ難波ノ極みく世にこれ
名どぐろけふ洪産といふまゝこれをもよる
歌有り

やうどにむいそふ聖べ此ふまゝ原ふ代よ
志げれとくあそこのき福ん

ウエモガサ
種痘をかくいわれたるなりまゝとやぶれ種痘乃
ちどめは英吉利より何ごうといふまゝの人此
牛の乳汁をさる者此と乃痛せぬ哉とくねい

得たることなりとぞかくら此國をどにを今も
牛の乳汁をさるるくふたるをさあこふはが
あふこととなく物ごとふれまゝ國ぶりなりと何
ぞと人此何ふこい金必のいし一のさぬ哉
ぬりりかねとるあり和名抄よ、酥音與蘊同牛
羊乳所為と有り民邦式に允諸國貢蘊各依番次
其取得乳者肥牛日大八合瘦牛減半作蘊之法乳
大一斗煎得大一升とて一斗此乳を煎浩め
く一升の蘊とありありこれ牛も典藥寮の乳戸
に飼ひく是を掌るる和藥使主の家業ありと

より姓氏録三代格等に足ゆらば乃食物よか
てくくふにいつく菓也とぞかかれざらば種
といふものほくまにいつく菓のねむれを
おほやけのおにいたくまいつく菓をばさるは
春のけい免れ大臣の古答るほどは蘊甘栗の二
種をむ勅使をさだするもの江家次第あどに
のきられさるにきく知るべしとていつく菓にあり
て今なきものせしむるものなきはあはるは
さるれき世乃さるに結果てさるはいつく菓を
たき津代よなるさるさるのあはるさるさる

まぐせさる人さるさるはかう西れ夷乃國をさよ
まばさるまばさるを國にしていつく菓の
なりとのみさるはやせさるさるの國にあり
さるさるさるさるの心をやんさるさ
しをさるさる目越つさるさるさるさるさる
ある國とさるさるさるさるのさるさるさる
まるとさるさるさるさるさるさるさる
なりなれ

○鮪と真蓮とは同異年々随筆 石原正明

鮪と真蓮とは一物の二物と詳なきはいつく菓

似く、何れぬ物に、これを鑑定する方、魚市の秘
説なりや、其品は高下は、同くたゞ、も異
あ、げとぞ、ざげり、見、ま、難、ま、物、此、品、乃、高、下
さ、い、ま、を、げ、を、一、物、と、心、え、た、ん、と、あ、げ、ふ、事、か
何、ん、陸、奥、に、物、一、た、り、一、頃、金、華、山、は、あ、り、大
原、と、い、ふ、里、に、や、ど、り、に、家、あ、る、ド、ハ、漁、人、少、く、其
頃、び、を、取、る、や、い、の、い、ま、び、や、真、黒、と、い
づ、の、異、な、る、と、同、い、い、を、同、物、に、く、春、鮎、と、い
ひ、秋、真、黒、と、い、ふ、と、差、し、ま、い、

○斗鶴善庵

朝川善庵

慶長の初、紅毛人自鳴鐘を始め、持渡り、と、ま、日
本、人、に、口、を、れ、ざ、る、ゆ、ゑ、別、に、と、あ、い、や、ま、ま、に、佳、名、を
擇、び、て、名、け、け、り、折、首、明、此、商、船、秘、到、せ、い、あ、た
相、續、に、及、び、に、其、形、斗、に、似、く、鶴、の、晨、を、司、り、て、
時、を、報、ぶ、も、う、の、如、く、な、れ、を、と、く、新、よ、斗、鶴、と、名、を
命、ト、其、記、文、さ、い、し、添、へ、て、贈、り、一、枝、紅、毛、人、官、府、へ
其、ま、上、納、せ、一、由、其、事、の、大、要、ハ、白、石、に、東、洋、に
ゆ、ぐ

東洋卷七、器用第七、漏刻に慶長中に西洋人ト
ケイといふ、これを奉らせり、あり、を、制、し、倣、う、て

製する今をさかりに行われぬトケイといふ事
番語にもあらざらん此の時乃事志す日記に
は斗鷄と志す一ありけり此れを明人けり
舊語を譯せしめざる所なり此器
乃製斗鷄と志すなるものありと乃指是
所に隨ひて此の時を知らず日く鳴りて時を
報する斗鷄の如くなれば一と名付けあり
今これを字様用ゐざるにや

大勸隨筆にいつり斗鷄をいかにも種名あるを
何者杜撰に充字を以て時計と書きしより
時計の字行をれてトケイは名のみ傳はり本字
をを知る人となきやうにあり近頃清人の日本
此の故記せる書に枕時計機時計此字を出きを見
れば今は清人まごといふ日本にいた時計乃字を
用ゐると思つゝあるん

○和名此和乃字の更玉つま 本居宣長

國乃名れつづり此和名とわく和此字をづりな
る故をよそ添へられしはなまごらいつづりかり
つる錢はつづり思をむづりつづりは和名郡
ありと上泉下泉と綴るはなまごらいつづり出で

たる國此名を多夏を福なりがくくぞ此郷乃内
 府中村といふに今も和泉此井といふやめくた
 き清水ありて、そとに泉井上神社和泉神社など
 と何重く式にも見ゆ、統るよ、並河氏がかさる和
 泉志を見れば、此和泉此井を擧げ、其水清且甘
 と記せるをみて思ふ、此清水上つ代より、心や清
 く、甘かり、故に、お泉といふも号も、和泉と書
 きたる、其里人など、お泉といふひる、
 つまひらごうて、名も、清水あれ、京人など、と泉
 とおみひらごうて、お泉といふ、郡乃名に、國此名

にも、お泉、城、まづ、國郡を、此名、二字にかゝ
 り、お泉、故に、文字には、お泉、本乃、名、此、如く、和泉
 や、は、書、く、なる、道、一、や、ま、も、乃、國、と、信、に、も、た、ま、は、
 多、お、や、ま、や、と、お、み、ひ、ら、ご、う、て、は、を、お、泉、大、此、字
 を、そ、と、大、和、と、い、く、と、同、ド、と、い、ひ、也、され、お、泉
 乃、和、泉、字、は、も、お、泉、衆、と、い、ひ、け、ん、ゆ、名、と、も、思
 け、あ、り、

○城をいふこと 下枝の 中嶋廣足

上つ、お、城、や、い、つ、ま、は、後、世、此、城、乃、如、く、志、く、り
 たる、お、泉、を、い、つ、ま、は、後、世、此、城、乃、如、く、志、く、り

垣るどゆひ廻ら〜るを〜つひ〜古事記書紀
 乃沛新よ多迦紀やあるは言城れ〜るま〜福
 城積置く所を福城といひ〜より其権にして軍人
 此籠る所を〜福城といひ〜也又丘墓城奥津城
 と〜ふふ〜乃新に多く見ゆ〜るま〜
 此〜は古事記傳よく〜つ〜れた系
 の如〜後世城をシロや訓むは由名乃山城
 よ〜つ〜此也此國名を〜山背國や
 書〜名義と山背背の意あるを延暦十三年
 山城國とわつ〜日本後紀に見ゆ〜

そは文學のみを〜は〜訓をもヤマキ
 や改めらま〜其まの藤井言高の松林藤葉
 にくけ〜如〜近ごろ出で〜栗
 系佐充が先進補像玉石雜誌といふこれに唐書日
 本傳などを引きて城をキと訓むを柵の傳と云
 ふ〜云〜代れ義云〜といふを〜
 つの〜を〜らぬ〜に〜

○女の眉そる事 陸奥 石原正明

女此眉そる事は感として畫かんとて此ま〜る
 ちばに臨れ〜の〜


どらやうとびとれをそきをそり落しとだも
ふまうに垂くなり今犬うは刺りてまの
かじん物とねのひとめをまゆはるも也又
けぐはめをな乃まばみとねまげなるをかく
さん料あり共よ女と物心づきとねのむき
なり怪にふき枝元後といふはけぬまあぐら
ねやまにかりとる意をかうと

○郭巨の黄金の釜は金の釜にあつた
世変 百後

山崎美成

蓋簪落し、郭巨將坑見忽見黄金一釜、釜上云々家

求むに孝子傳を引けり今廿四孝乃圖を降くも
此、黄金を忍びくを誤なりこた一釜に満つ黄金
を得るにこそ黄金はあつたりあり法苑珠林
に此事を記して於土中得一釜黄金とつけりえ
益と利とも過し過ぎし年畫師永納の郭巨の故
妻を忍びける妻ありき永納の布野畫史ふど此
著述あるやど其人あれを家求をよみて云をく
見黄金一釜とあり金乃釜あつた一釜釜とある
画史杖黄金一釜とある時え釜といふを量の名
あり論語に與之釜の釜はと重と一釜の釜とい

ふとては、金釜にそりて、やうて、園を形
 乃重縁をたゞみ、たれど、これとまゝ、地をり、たて
 ふふ、福徳に、注に、釜を、六斗、四升と、あり、と、斗、斛の
 類に、と、目方、乃、と、ふ、あり、と、は、存、厚、蒙、求、は、釜、上、縁
 に、と、ふ、と、ある、を、り、て、と、六斗、四升の釜に、あり、と、
 して、知る、べし、や、つ、つ、つ、史、を、要、に、略、繪、と、載、を
 る、埋、見、賜、を、此、圖、に、と、、乃、如、き、と、重、を、數、多、く
 掘、出、ぐ、と、か、を、を、の、け、り、回、書、に、載、を、る、採、函、が
 圖、に、は、冊、か、く、乃、如、き、形、を、と、り、け、り、と、され、を、釜、に
 是、り、と、して、い、ふ、ふ、ふ、く、た、ち、と、と、い、や、と、ま、り、と、此、圖

あて、と、已、に、い、つ、ふ、如、く、釜、上、縁、と、い、ふ、と、本、文、よ、り
 是、ば、な、り、誤、り、や、と、い、ふ、也、。

○坊主といふ稱片には 最原孝麻呂

坊主は寺院乃住持ありて一坊に主といふ義ありと
 乃外に衆僧も同宿といひて坊主やはいふべし文
 治元年十一月廿二日、前住縁守源義経、吉野山乃雪
 を凌ぎ、潜に多武峰より到着せしに、南院に内藏
 室の坊主、十字坊といふ大徳僧、義経と貴族
 ともより、東鑑にありとされ、住持を坊主やといふ
 あり、まゝ、同二年三月六日、大衆塔起によりて、其所

よる山卦乃姿となりて大峰に入らんとききられた件
此坊主乃僧義經を送りしより一河原にこれ住持
とづらうと送るもなり。衆徒ふ送らるるに
あつた。然るを當世を法師のきくはとつては、医
師業を能人遊人隠居ふ事とまじく剃髮は人を
悪く坊主やつらう。事しきは燕とづらうとるを宿
を乞食坊主宿なり。坊主やつらう。一坊乃るふ
く宿ありの名とをわ。

○諸國每家乃仏舎

休職 湯筆

渡邊重喜

天武天皇紀十四年三月壬申此詔に諸國每家作

仏舎乃置仏像及經以禮拜供養とありふ文を元亨
釋書に引きと許天下民宅構仏宇と云つるより
禿氏等乃諸民の私宅に仏宇を造れる事とねと
ふも傍痛くふん。是を清原朝比呂に諸國每家と
は諸國司乃政務執事とる古家を詔ふあり。官家
を所置る國府の廳に之。其毎國の官府に他置る
仏舎もふも。國分寺あり。紀中天下諸民此私宅
を詔ふ時と。百姓舎屋と稱する例なり。何ぞ公院
や諸山と詔せん。耕耘をせむにすぎ下民乃小屋に
別に仏舎を作す。供養禮拜せむとつもの。勅

許一語ふ屬道統を通過玉勝間等に釋書と曰
説を唱ふるの謬れ也一記もの也と云をれは確
説あり其は後日本紀乃大寶二年より次く上涉
獵一考へずばねの成りし知るべきこと此ぞ

○苗字と字と一字づつよ隣女 晤言釋 慈延

○曾丹
曾根好忠を
云ふ拾芥抄
に云く曾
丹を丹後掾
也而始ハ号
曾丹後掾其
後ハ号曾丹
後末ニ更舊
テ号曾丹也
此時好忠歎

今俗ふ羨善近五あやうくひに家名と俗名
と錢一字づつよ中昔より此変あり康富記ふ
云く今夜飯新許念可出之三首内々受指南云
云此飯新也足利乃家臣飯尾新左衛門尉ありい
に一乃曾丹とをれたるひなるべし

○畿内かゝの
下枝

中嶋廣足

畿内此國は犬和山城河内攝津はく四畿内より
一を河内國を割きと和泉國を置れより五畿
内ふ成りしものよは若井もあつた松の若葉足
代弘訓が神依板あつたに持統天皇紀元正天皇紀
を引きまゝにけしつゝが如し今按むに孝徳
天皇紀大化二年改新乃詔ふ凡畿内東自名懸
横河以来南自紀伊兄山以来兄此 云制西自赤石櫛淵
以来北自近江狭々波合坂山以来為畿内國云々
と凡口々には難波長柄豊前の都にの更なる

之イハレソク
トイハレソク
ズラン云々

志上乃二書訓が尚私引起るよりしつとあらまりて
 神代の変ありさる此畿内を國界をおぢりたる
 にはあらび都近き四方は地にうぢりをして定
 陸つるもたあらむをおぢりて四畿内といひ
 一吋乃四社字を四方は四はく都近き四方乃地
 を限りて畿内國とは定めるもひも能くもべ
 しとく世を隆る都を遷さるも一変阿またび
 なる一のばい法ら四つの國を限りる名はや
 うよるりゆきく和名玉を建てしれ後をやが
 て其意を以て五畿内と稱ふやうにも成りに

や阿らん四方乃海の変りをしるもよし此海といふを
いつらうよつれ海とよみ候も一ををおぢりす也
 今乃系にありては近江丹波など哉畿内國を以
 ぶ此をさるもあらむ也さらんいつらまりて
 五國哉はみ畿内といひなるし来まるを名はみ
 傳りて変實をうらむを也也

○小笠原島新むりの記新開 黒川春村

伊豆は國ハ丈乃島のもあみお緯二十七度ぐ
 の一はもやられひむ一四度廿七分にあらりも
 むられせばきそまをく乃一まらや一を東照れ
 神代祖のあん時文祿乃うとせとうよお笠原

○新古今集
あづまぢのみち乃もて
なるる陸帯
うごやげら
まとおまん
とぞ思ふ

此山の東をりふ東山道乃山より東ふれを存る
べー日本紀に山東や見口は坂東此山まごを
ねあづてりひたまご後にい上野下野出羽陸奥
にわだまると名なり吾婦を坂東山東にりるれ
称されが出羽陸奥といふるありあーらづまら
此道のをもくなるる陸帯とよるるはぶのゆゑに
いと

○國里此名に唱と字や異あるを此閑田 耕筆

伴 資芳

國里此名に唱と文字と異あるを此近江を

淡海あれごと近江とゆふより今此字を改
まる遠江も是と對を上毛下毛も唱の跡りて文字
は上野下野と改まりむけらるる武蔵相模
此文字はくまのふもよむとむさしむさしむ
さつと乃異武者のらゆありやが茂氏とつ
りるる間諸山好文に改換ひ一此所為
にや今もつふ人を書く人も訓をくあや一海は
るなり里乃名をかすの錢春白や書けるは春は
うまむ美日はくくくふらにや澤鹿とと古也
に足ゆるを明なり河内も交野郡も私郡私市と書

久米田池も竹基信正奉開して、重武天皇帝之行
 幸一光昭皇后もくばく功をくけし、臨ひ内大臣
 某跡よかをもと一臨ひて、神龜乙丑二月より、鋤を
 トめしと、天平戊寅此秋、舊成一たりしより、竹
 基自筆乃記に跡れり、めぐり三十餘町池床たほ
 よも、六丁に、今此田高六尺餘、石十二ヶ村よあり
 きり、水をくぐり、好少は、むぎ、水神を築り、すて
 乃作法みふ、竹基自筆此定規よ志し、今とあ
 不たぶともなり、此池すき、安永八亥、此四月末の
 六日より、第三番の樋の、濁水湧出づ、おそ

河や、とて、村民は、いひつ、内ふ浪除を、まじ、又
 水跡此者を、いきて、其ふも、枝さぐり、せな、肺
 腑を、くぐり、せき、ぬれ、ど、か、あ、ぶ、く、と、あ、く、は、
 どの、く、す、ふ、う、ら、に、さ、つ、き、教、日、室、二、刻、を、り、堤、二
 百間、餘、破、缺、せ、り、暴、浪、此、逆、る、勢、い、言、山、此、崩、り、
 が、如、く、横、波、乃、物、に、激、き、考、を、雷、霆、に、ひ、と、一、括
 流、敷、村、ふ、を、び、り、家、を、倒、ま、し、と、敷、十、田、被、衝、く
 こ、や、敷、頃、あり、ま、此、時、や、づ、れ、ぐ、ち、よ、り、奔、流、に、随
 ひ、て、周、四、五、丈、なる、黒、き、物、が、つ、ら、つ、躍、出、川、お、も、や、
 訖、の、出、現、せ、る、よ、も、つ、ふ、り、ど、く、と、あ、れ、人、と、證、見、と、む

る者もあくびで恐れまじくしてちやぢりによげ
去りぬ。明けられ辰二つばかりに、水勢や減下
たりに見れば、大木一株の根乃わかれ、まじくど
ありける。是を取り、あつたて、其全まきをはありみ
るに、周凡そ十八九圍に、く徑之丈もやあらんや、思
ふ様れ根也。此まきを、開く人、走りつどひ、切取りつ、
得づとて、愛とせり。やつたれと、心ば、まき、後、喜木、最
右、南門より、此、事、其、岡、まじく、ば、まき、解、木、や、あ、る、や、つ、ふ
に、喜、よ、あ、れ、吾、家、り、苑、ゆ、れ、を、と、く、め、ぐ、す、れ、ぬ、是
を、香、合、硯、箱、た、ど、に、装、へ、て、今、と、ま、り、り、此、池、築、初

る、より、今、年、迄、一、千、九、十、餘、年、に、ち、り、ぬ、此、様、の、其
時、よ、か、く、大、木、を、ま、り、を、切、り、と、る、ま、く、根、は、そ、の、
ま、り、に、墮、り、下、よ、つ、ま、あ、れ、ま、り、あ、る、づ、一、今、吾、家
に、生、ひ、ま、り、百、十、餘、の、根、れ、た、ま、を、と、考、ふ、ま、り、此
様、は、十、餘、年、此、物、の、や、あ、らん、ま、り、二、千、餘、年、の
久、し、き、後、ま、り、生、れ、く、此、様、乃、根、を、得、く、ま、り、多
門、院、ま、り、つ、り、ま、り、一、此、池、の、ま、り、築、ら、ま、り、一、時
ま、り、は、久、米、命、此、故、ゆ、り、く、上、久、米、田、下、久、米、田、や
て、ま、り、つ、り、里、沖、乃、森、を、屋、ま、り、つ、り、古、記
に、見、ゆ、ま、り、ば、ま、り、森、れ、古、本、あ、り、一、に、や、ま、り、心、ま、り、た、ま、り

ことありけん。

○一日に二食新書 陶犬

ねほぬうね延

世俗之度乃食を二度此朝夕といふ食更ハ朝夕
二度のときありづつ一のとき度にありしれど相
夕哉食よりと心得一更のみ歩まり業人此に利休
居士乃時代まで二食あり已れ刻ごろを昼飯とい
ひ申時代夕飯といふを越後に登乃業此湯をい
つば己の刻時をいふ。當時一日よ二食あるゆゑい
乃業といば二年にありぬといふ。又一日に二食とい
ふ事た武者物語よ凡そ人百を言はしといやま

色一日に西度づくは食あれを是哉たんきんせがせ
つふをなるとあり。

○いに一の男女玉鈴を身けうごりせし一更ね乃

高井も尚

神代乃書に伊弉那岐大神の左右此神乃乃手纏
此事足印きりぞれと玉にぞありけん。業業集の
秋ふくつと乃たまたの玉ともしつとまばなり。日本
書紀仁徳天皇に事に勅雄鯉等莫取皇女所養之
玉手玉と見江又二女之手有纏良珠といつるをお
ゆにふくしとみし玉とみせりかざるせしあり。

同巻に、取得田道之手纏與其妻とある、手纏も玉ふ
るべし、履中天皇紀ふ、是夜仲皇子忘手鈴於黑媛之
家而歸焉とある、はなと志るべし、ついで、男と
玉鈴を手にすれつる、あはれ、又くびりもまきつる、ね
まけるも、を、神代に、志るも、いえ、れ、神に、た、と、た
あを、これ、う、神、う、む、る、玉、鈴、を、す、ま、す、の、阿、玉、は
や、や、つ、い、安、閑、天、皇、紀、に、は、幡、媛、偷、取、物、部、大、連、尾、興、
瓔、珞、と、見、い、れ、を、あ、り、。

○慈猿 古今著 聞集

橘 成季

豊前國の住人、吉郎八道といふものありけり、男な

りけり、時づねに猿を射けり、或日、山越るべし、大
猿ありけり、木に追ひのがせ、射けり、けり、ほ
どよ、の、せ、ぎ、に、射、け、り、既、に、木、より、た、ち、ん、と、
け、る、何、と、や、い、ん、物、を、木、の、ま、に、あ、く、や、う、に、を
る、猿、を、れ、を、子、ぎ、と、あ、り、け、り、ね、の、う、ま、を、あ、ひ、て
つ、ら、に、ね、ら、ん、や、す、ま、さ、だ、子、ぎ、を、を、ね、い、と、射、た
ま、け、ん、と、て、お、れ、ま、さ、ふ、す、ん、と、一、け、り、也、子、猿、は、
又、母、に、は、ま、さ、と、離、れ、ど、と、志、け、り、が、く、と、び、た、び、を
ま、ま、と、あ、や、ふ、さ、さ、り、つ、ま、け、ま、を、諸、と、ま、に、地、ふ
ね、ち、よ、り、そ、れ、より、あ、ぐ、く、猿、を、射、る、事、を、い、や、だ、

めてけり。

○孝猿 岡田耕策

伴 資芳

見島尚善居士傳りれしを京師より丹波路を經
く播磨に歸る山中にうづら向ふ所物落り何
あんと見れを猿ぞとあはれと集りし中
に
あかばけくやうれ物ほくあみたふ畚けごと
のそすあくつらぐらより菓あどあくなく
さむさぬるり肉より老いさくぼくしる猿
に
かに見ゆふらまぐらとてよつらるや志
みづらと母の親とてれをけ文に感どく

みちれつやぐられまなり形人に近れ
其情よお近きある魚はまはは是れ畜ふ
の伎
藝をまふれを別まきよく起舞せり。

○熊人語をたれ 上回

回 上

山獸乃中には熊は人よ別あまはれあり華山の
さね牛尾乃と三條下れれ路に菓賣り女
乃よりを免に出居るが熊乃子けつあぎた
わのれとらよまんとて菓物を買ひて熊に
あまをた女がやうとせしつふ考に
たらぶあまといふまといふ間ゆ
幾とて目

吹山よりいづれも乳をのむる旅人のさし入る
を罵ひくちどめは物を盗むてつらつらに今を
とせよふなきりといひりてあやふあやし時旅人
来あひて是のたまににて親場の料よきうんとに
やせりしに女はあかく言ひて何のをも言ふて
生涯願ひぬづりかやよあはしがくえんに物買ふ人
と多しといわれし旅人を得ておのをざりたをぞ
跡縁のさしありと思ひてこそこれに

○鶴相偶乃首をたもつ

新法

堀 秀成

長門國厚狹郡宇部村といふ所にちをもちて領

主に奉るまゝを務とす。それには片岡又十郎と
いふものありある時例れ如く鉄砲携つて己の
家を出で沖田原といふ所にいでけるに鶴二羽
相並びてわらまちあかりつとよき得物と思ふ
まゝにいつとある木立に隠れ玉のしほく
膝臺より取り既定めく放つふ一羽は倒れ一羽は
空高く舞翹まきり嬉しと鉄砲お捨て就きりて
見れどあやしく鶴は細首をおちらうりと覺えて
のし跡まじりかしく追き所に首落ちくちんと
草搔分けするぬふに得ばいづれいづれと思ひたり

しが其儘にやむぬさく首あきを徳を小奉らん
もつてなりとれたる己が役得やいふ事此ありや
猶言して家に携ゆぬあやぬ此日毎に所にお
巡り鳥越おらはけはやくも其年善れく廻れま
にありぬかくてあやぬ此とより歩行まきねと
けは彼沖田原に來りつゝ見れを今年も亦一
羽乃鶴降りぬらう。又十郎去年此事を思出で、
去年のあつに二羽降りたるを一羽打ちよはが首を
お断りけりすに徳を小奉らざやみしが今日
はよき可哉おたんとお思ひく心を沈めくおちけ

ふに、股に血を打得たり、あれを徳に奉るによ
ろしとお喜びつゝ其首をさきと引きて見れば、
何の羽合乃肉より落つる物あり、何ぞと見違を
つと乾きし、鶴の首ありけり、あつに序言つ
くづくお思ひを、去年一羽は鶴哉此種はくおち
し、此月乃今日や、是れよりさき、い彼時お断り
たる首は、おぬきと見れば、や、此鶴、去年の雄
お断りて、其時早くも、お断りし首を己が羽合ふ
包み、空高く飛より、あ、ん、さ、る、に、と、夫を
取見と、今日まで身を放さば、羽合に、込る、く、何ぞ

—とのあゝん、執乃心に月日知るべしことばは多く
ごと自然、感應するところありて、人よ—とて、今
月今日は相偶乃おき—日なるふ、其命墜—
中我愧び、いづ—に、あつ—まを思ひ、
るを悲—い—あゝん、ふおれ、朝と目—我
手に死ぬや、い—ある、涙—
らんと、又十郎を、神を、絞—に、か—
—、清子、妻—に、此—、彼大鳥役を免
きん、を、出—、也、此を、慶應三年の、
ありき、云—

○武勇評傳 たひ

高原素麻呂

元福原素穂の義士、教家、乱—、目—、
間十次郎が、鎗—、突、武、林、只、七、か、
つけ、大、刀、も、き、り、伏、せ、り、互、に、首、と、
ん、と、評、論、に、及、び、ず、刀、傷、及、げ、ん、
る、と、互、に、大、石、内、務、助、け、り、互、に、首、と、
ど、め、せ、只、七、に、首、討、せ、た、れ、ば、惟、方、遠、恨、あ、
り、と、あり、昔、も、さ、り、あ、り、大、江、朝、臣、と、小、所、
道、風、と、互、に、手、書、し、評、論、し、て、止、ま、ら、ず、上、の、評、
は、く、勝、劣、を、決、せん、と、持、出、で、し、に、執、り、て、

乃手書の道風亦劣るもたゞを道風乃學才此
朝經に劣るが如くとのさすむいゆ急に筆方遠
眼あかりしより江漢抄よりわれとまきを古
今文武雅俗一對の英傑なり

○山陵福兼會

上條良材

山陵乃かゝるを允て北たつくしをぞれ高き所
はく東西ふふつ一の岑あり中をすこひくし
そ乃全体も智の嬰を刷ひくるこの如くまきむ
と川の園あふりつづまことそれめぐり乃池
そのやふあく廣大叢生なること此二つは

寸付形乃淨室あふどあげつらふはひつとあ
んぞは和泉國大牟郡乃中に寸付まきく三つの天
皇乃陵のほりにぞれ取る墓ねまきむさき
あふことなるとこたげくかぞくつこぞあり
けふぞれ中のねまきあふえみなが乃嬰を刷ひ
たるこの如きものみこぞ乃めぐり池をふつ
くして廣大叢生あふことなぐ三つの天皇の陵
にねまきぞれまきむ形あふことなむもためぐ
り乃池もありつるが今を田畑をなせるとんゆさ
りけれどむつこづれ乃陵とまきむことな

らび人乃かやういふをいふをぬこしれみま
 里まきまき南郡摩湯村ふありける不破内親王
 墓又日根郡田身輪村にありける紀小弓宿禰墓
 ちまを河國の文らほと見は侍る墓にまきまき
 一は諸王諸臣の墓ふなんありければこしみた
 のれゆきめぐりて見るとは二墓とまきまき
 乃翼を刷ひまきまきの如きまきのあてまきまき
 里の池をうかくして廣大敷重あることか乃大
 多郡の二つの天皇乃隱よねまきまき城まきまき
 ち天皇徳王諸臣の陵と墓と乃す付証しければ
 めまきまきまきのいふまきまきをや

らぬ乃うら まきまきのうらまき

此田身輪村に采女大海紀船守の墓といひ傳
 へけるまきまきみまき廣大あるものなまきまき
 ぼくはまきまきまきはまきまき見はまきまき
 何まき乃けまきまきまきまきまきまき

○仁徳帝の御製 ゆきまき 富士岩津杖

新古今集にたまきまきまきまきまきまき
 りまきまきまきまきまきまきまきまき
 らまきまきまきまきまきまきまきまき

あれをまきく日本紀竟宮歌に得仁徳天皇とて
て時平乃乃歌也契冲阿南梨が代西記に濟
かきわつま一後これを見つてうらなげられ
まこと似閑ゆが書入に足ひよりさる持説す
あままありけるをや近江天皇はあまの四乃が
わの廢の云々の歌とたうに所見をなけ
ど同日の福るるべうにわつて二首とにこれ
清世世の歌乃まきくはもわつて

○九條廢帝 つまら 本居宣長

○九條廢帝
明治三年七月
仲恭天皇
御謚奉ら

九條廢帝と申奉るも順徳天皇乃第一の皇子

せ給ひま

少く清母を中宮為原立子東一條院と申一後
系極攝政良経上の清女なり帝建保六年十月十
日に降誕清清の懐妊と申す同年十一月廿七日親
王宣下せらるに皇太子よ立ちし事ひ系久三年四
月廿日に清年四つにて交祿あり然るところよ東
乃賊也條義時つてく喜びく申一記世乃みど
れねりてかの族素時時房あといふ賊とてね
一の清り同くま六月に系よ乱入りていもか
らく三所乃天皇とを遠所に遷奉り此新帝
をとねおろしなりぬらわさまたごまよ

のつね乃あををこりつひもん方とるまに遂まの
まのことにぞありけるかくて此帝の其七月九
日に位を讓りせ給ひてびそに九條院より後深
ありぞ是より此院に清母女院と改同居ましま
しと文暦元年五月廿日に崩御當年十七に葬ら
けりまにけるまに清元胎乃儀もおまにまに
けりまに更禱ありとておづに四月がほま
にわりまにせ給ひてくまに即位の儀と行なれざ
りしうばは金代の清教もつとせ給はせ給ひあり
いづれ乃地少の墓奉りけむ清陵の在ふも関に
ぬはひて

あまに法印性慶は女の腹に姫宮一とて
生れさせ給ひて義子内親王と申す弘長三年三月
八日やに廿八に院号かろり給ひて和徳門
院とやにま。

○平城天皇は清名上 同 上

平城天皇は清名上 同 上
平城天皇は清名上 同 上
殿と改給ひてこれかみすく皇子とて徳王
どの清名いづきも清乳母乃姓をとれり例に
此小殿と申しと續紀廿九乃卷より清乳母安部

小殿朝臣堀といふが名にさる此姓あり安殿も此
安乃字と殿此字と城より移つる也。さきく去る阿
傳と字喜に續奉るあり紀乃國の在田那はも
と安傳移りて書紀續紀に阿提那とも書かれし
るを去れ天皇乃法名よ法るをさく大回元年
に在回那やを改められき。

○獲王大明神の事 續事紀本 記者不知

和氣朝臣法麻呂との傳りい誠に和澤に様あり
忠義此後より一姓に智仁勇乃三つは徳とゆぬ
傳流ひ大君の傳為ふは一命を差芥よりし輕ん下院

に神獲景雲の頃只一言此下に妖僧弓削道鏡を
追退け家脱とも浮雲城よりさるにけしむと
一天晴明ありて日月乃光もさしはるふ思ふが
やけるが如く動るさ大津世もさるかすりて
今く此君の傳りきをさりけりしに此都より
らせ給ふ御も潜よそ土地を足さぬすみやうふ
其功をさげ給ひてかく万代にかきりふさ平安
乃都城定流りしもの君此傳りきをさりけりし
揃津左夫さく其むり揃津玉をつささざり治
流りもねもさる時を諸國に便りよき流

名はあまのゆゑよかめふ乃多き品をめてまゝなま
國は物にりつりめ、素買れ事なまゝ道すこを
治ひ民部卿にまゝまゝ時を天下乃治民を管
理をさめまゝひ一職なまゝゆゑあまゝる土地
をさゝく一財をもて開き新ふ田つくりめ
と飢ゑる民救すこひ治ふそよひ所よりなら
ざるこゝは南山、檜市、田村をまゝく此君の開き
たまゝる土地に一其子孫の家と今よのこり
く其材の人とはむりより附従する民年ある
より性よ開傳へたり、治ふ山、檜、大和、橋津、和泉、宇

治川筋、平川とも、或をさくら、まゝはあゝたゝ堀
里ねり一治ひて水道を通し、舟難をまぬぐれ
一先治ふこゝはふるまゝ文はこゝをく見ゆこ
里中それう一医乃道をもくけくまゝありて
まづ一病めふ人をあまゝまゝひ治ふまゝあま
ふるに暇あゝびとあんながれを大同年中にわが
治國乃業は法被あつめられ、大同類聚方の中
よ法磨之法被とあまゝこゝり、これにまゝと医
乃道にまゝし、まゝとねりまゝとづり、かく此君は
功業なり、もあゝたゝまゝがゆゑよ、まゝ

に子有餘年にならぶとらども其流のまをのり
せやうどおやう一糸永日つのもや一海生中の又
日ふ詔乃涉使をさ高嶺山にまゝせ給ひて正
一位護王大昭神と崇めしめてふ代万代をく
らぬ神垣と高起高嶺乃にたまへ申とくまめ
こころのせは後と思ふわがやを流ふらつたや
りりかゝるに涉使をさしめや下

○高嶺山和帝社勅進帖の序上 長澤伴雄

○活目天皇
御謚号を垂
仁と申す

和氣朝臣清麻呂卿を活目天皇乃皇太子、
鐸石別命の御裔にさす神天皇より柏原天皇に

て五代乃朝廷に仕奉りて忠實なははれ
そと賜ひけるは世人よくはれ如き
中には神護景雲の年間道鏡清門の寵よほ
らひてお下けあもかこころも皇位をわぶ
け奉らんとして密に太宰主神中臣阿蘇
麿と相謀りて変を神武に託して涉使を
請ひまゝせり故に天皇清麿卿を涉使と
して筑紫守宇佐に遣はたまひて其後途の
をり道鏡ひそかに清麿卿よつて今宇佐神
乃勅使を乞ふは我を皇位に即けんともあり汝

それを以て得て事成就を以て汝も大政大臣を
 授けんとす御懸一あがら出立りてこれ時に
 とほきむねやれけつらん一篇乃文案を記
 て跡一あられもが今あほ言雄奇に秘記れり
 とぞかきく宮子に還りまわると神憑語をお
 ままのたまひ奉りしは道鏡の怒情
 りく卿乃本官を解きます之國乃勅を断ちて大
 隅國に流しまわらせしにのみきたる
 事とぞあらずやこれ續日本紀を始に何れ
 乃書とすは人の大い人の知事とす

れを今さらにならばあやまきりて事
 かも此卿乃御魂をやさばりり時相を面れ道鏡
 が威言をこねれども自ら業壽をむむが
 身被殺す處を智を志する件のはまある忠実
 心けりし権一とて極一とて言は禁にわけ
 いまんはあまのあまの法事あり善一卿
 らねる一なんに言善の露れ一濡ふか一これど
 全統をおぬかたにねれあ人もねや
 一のすがに神の助護^{ミヤモリ}もあやまらまらり物
 ころを卿乃御魂のつりぬれあれたおほ

見あくらす

すい上乃件よかつら言出でし趣哉心にあ
ぢをい魂よ徹しとこし神徳になしむいあや
かり奉らんし願ふべし神らんふをそし法社ふ
と後でその神靈を家に齋祀りしひしとふ
に身をつくしと信みますおすづく仰なるべき
ものぞとよ

嘉永四年

長澤伴雄 謹記

○若上乃射術

細起

記者不知

貞觀十二年の事よもや奉の以都良香の家ふ人
人弓射けるあし行まあひ流ひたりければ人

思ひけるも此君は戸ぼををどら志まきみを出て
ずして學問のこら哉とつとたまふば弓の本末
も知路をトとねりひて心みに流弓射を流ひ
てんやや申玉ひけれを弓場ふま出でく弓又矢
をまけげてし流ひと流ひと流ひ養由
かひづつまかや有りけんと目とあやにぞ見
まひける流すがと乃みなるばあら流ふよひ
とつとけづれざりけまば都良香より始人
人ねらまあま申けまやぞ其年三月
廿三日にや献策すはけしあや

○林道春史記を子守す机の 記者不知

林道春をいふも、米屋又三郎とて新町孫小波也此
町人をり幼少より聡明にして書問を好むが
其時分また版本乃書も少く大部の書籍は友家
歴々の文庫にのみ秘ありき史記といふ書何
とぞ読みとくねのれとぞと知る方ありて
爰に嵯峨角倉吉田了意の許よりあるより問及び
之誠江魁望せしとぞ申す候申さば違ふ事
是しとぞ然らば此方へ来りしひて讀申されよや
申されども家裏乃坊あれば何とぞ一冊ばく

宿所へ候下ささいふやうに能くしゆ名其源切
を感じて史記一冊かりければ宿所へ持帰りし書
夜に書写せしめて五日又日に嵯峨へ持行きて全
部をついに書写しけり今に此史記は宿本林氏此
書種とてあるより嗚呼古人乃苦學かくの如
く宣ふる哉其博文強談實に一代の大儒なる事

○文覺西行を畏づ井陘抄

頼阿法師

心源上人語に云く文覺上人を西行をふくまれけ
り其故は遁世の身とるを一寸すらに佛道修行の
外他事あるべしとばるるに教養をたたくべし

こうそぶさありく桑にんき法師ありづづくに
 こも見あひたるばらうらあらるる海まよふたれ
 阿らまらにんありけりおまごも西行も天下乃
 名人ありもささるる阿らるる珍事たるべしやあ
 げまけらに或時言尾法花舎に西行まありて花
 乃おげあやなまあまけりまおまごもおれが
 まらまよふ人ふまらせと思ひま法花まとはけり
 坊らゆりまけりま庭にお申はまらまら人阿
 まよふ人まらまられまけれを西行と申すまれ
 まらまら法花舎結婚のまらにまらりてまらまらまら日く

れまらまら一夜此海庵室にいまらまらまらりてまらまら
 りまけれまよふ人まらまらまらまらまらまら思
 りまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 らまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 物まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 めまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 けまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 あまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

ひいに附ふ心困に淨物徳休ひつるす日比の作を
とがひてふと申しければあつふふひふの法師
どりやおれも文覺ふうねんごうものつら
やうら文覺をううんずる者されと申されけ
りとう。

○二人の法民

因田
次第

付 資芳

伊勢庄神祇より旅人を竹輿にのせり行く人夫
の者先肩を興と之衛とつふ後を善之右衛門と
つふ途中に後肩此もの金乃包みたるを拾ふ
開見れを拾ふ片あり旅人を送りて後此金祇長

に持ちまきと落しる人を求めむるに誰と
志すれどよりと拾ひたる者取るべしと指揮を
善之右衛門とつふをば興と之衛にあつふ
しとつふ凡そ物荷ひてゆく者若し物を拾ふ時
も先肩此者拾ふばは後肩のものに配分す後
肩の者拾ふときは先肩にあつふが縁路の定
めあり先にゆきながら見つけざるも其者のあ
やまらあつゆゑとぞこれを興と之衛此定めを
よく受くば理ありとつひてと一祝となつる
百歩を興つふ一盃を傾く處とつふ善之右衛門

肯らず流ひて分づべし驛長又あつうひてさ
 を拾片を拾ひしと乃取るべし五片を與え兵衛
 取る處しとつどもあや互にまじり驛長もせん
 うとつきと然らむかゝる年せんしりて西人内
 外乃宮詣し此金銭費すべしといはざりて大きに
 喜び其言よ従ひて詣てしうごとく回國のうちよ
 と里程さしと遠うねむ費す所後ふ貳歩二朱
 をうり残金あまるとあれを讓奉ふともあはれとや
 此おとく既に欲し一許んとせしが其銀は遠く
 あれを益益此路費に費さんとは實に惜むべ

一唯半かしておのおのが欲する所に用ゐよと
 一ひそあつうひしふ折れとよとを係た年は借仕
 ひとありしを驛長のけしひそて小家を置ひ
 て嫁すむ答之右衛門とかねくの願ひ也とて
 妻子を引きつれし信濃の善光寺へ詣ぐとりさ
 て其かへるさに小溝ある所より尿志りしが脊
 に厚ひしと包物の佛乃沙影など入れしをあや
 まらと溝へ落しりむあわて取上げし時それ
 に付きて紐を引出しり紐に付きたるを袋に
 中に重五拾片ありねどろとて其所の里正を尋

ねて其主をのりてむるに其あつりに為しきと
 いふをれあけきばそれたをたに付きしる福なり
 携へらまよとひひりうだ、穉するよりなく持て
 かつれりかたりしうだ、つひに富豪といはるや
 ふ成りしう、彼と之を懐と田畑をど買得くよま
 農家にたり、兩人とと、初め乃所以をもく兄弟
 約を存し互に先立ちたるんもの、柩を昇くべ
 と誓りし、其之を漸もまきしに身あり、善之右
 衛門を今に生存を若し死せむ、又と之を漸が子、其
 柩を昇くべまよしあり、寛政七八年乃半と彼孫

の者、我僕とありし、時ふ語りぬ、たうと宿願と
 いふものは、諸方此人をあつらひくあらはし、乃よ
 かりぬ、これあつたに、かゝる清民の探ひく二人まで
 ありしとめづらしき、妻たるに、かゝる金のみく
 かゝることありし、も不思議也、おれを若し賊ふど
 乃落して、まも名のりが、かゝりし、鉄溝にありし
 を、隠すまで取出すひまふ、うりし、あどよや、

○鄙賤を忘れず 婦女

徳川二代將軍秀忠の乳母に、く大婆どのと称せ
 られし、まよと、岡部某の女と、初め、今川義元此

家人河村善右衛門に嫁し一子を産めりしが、
寡居して後召されて秀忠の乳母とあり天性
聰明に多くよく儉をつとめよく容をうけその徳
乃乃世に傳ふるものすくあるべし。乃大濤母
おとふ一二回が一つふひ乃奴婢より興丁に
るまであまきよびつどつづつる飯を盛り
饗するをうしあまき娛樂となんけりある日
つものごとくが一つふひ乃もれごとく饗する時本
多正信不意に到りて此状を見りたまに愕きこ
たひのふれをかゝる賤しきものを親しくあたま

ふぞ数多の侍女と侍りあつたれをそをさし
こそあまきめたすをめとつふに大濤とちり
飯匙をねきつひけりは頃日人ありて卿を穢者
にけりなりとつふとれあまきど実をうとせねも
つりふ今其言乃虚ありぬを知りてそもそ
卿弥八郎といひをりをを忘れつるかこはを
もや三河に生れて鄙賤の家ふひとくなり
圖らば將軍の乳母にめされし後幸ありて今日
此榮華をうれごと其意をねとつば僅ふ五七人
乃容きし心乃すくに饗するふとあまきは

を今をかくあましく乃人をつとむ饗するを
うれむせめて其産を以てせぬ為にみづから数人
乃飯を盛りてうたなまきたのーみやうをすれざ
る哉卿富貴にほくら、鴉喜をほりますにー
それ中を忘れーのみあはれはるの素志をも
妨げんとするをそとてしけれさるあくらほく
樞要の政務ふ與るまいつととあやふまかざりあ
ましく痛くつひたしなめーらむ正信つーまに
えまぐぞれ産をたらぬ。

○富女が友愛乃誠強盗を感ぜしむ同上

富女を大坂松屋町乃紙商某が長女あり嘉永元
年七歳に父を亡ひ母乃手に鞠をも兄をむ仁
三郎といひて十四歳弟二人を四歳と二歳とに
ていつとをさあければ母の手に一つは紙商ふ傍に
金銭乃両替ふざりてくくけり其翌年の秋何
る夜強盗ありて三人各々刀を抜きをたら戸を蹴
破りて家内ふ入しんとすを母も疾く物ねと
をまきし一アそ幼児を懐ふ一衰口より遁れきり
ぬ兄仁三郎と継きを出でんとせし強盗等これ
を捕へ金銭乃ありかををーしよと責問へ仁三郎

詔りて、これを此家此奴僕あれをたはて知れば
やうふを盗ぞといふは、むかひぞと、か此背を以て
二つ三つ撃ちければ、其危きことかぎりあり。富
女あつた、やうやう八歳ありけるが、此状を見
驚きかあり、みがねと親しき人により、トシゴト歳勢あど
いふ妻に、贈與せられ、小玉銀入進おきし
小囊を取出し、弟をば後に、せ白刃乃下に走
せり。金貨くば、あれを系らせん、これ代りに
兄を助け、さしさし、ふて、許きことかなをば
む、其かけりに、敵をころし、といひければ、盗

等互に顔見合せ、世にもやさしき稚子もある
これかなづの、おれをころすに志のびん、釋し
つかをすべし、やうく、そはまゝに、ころさうけ、是業是業
官一人乃盗を捕つて、糾問せしに、此事を、カガ知りし、
ければ、即ち、富女を召して、其始終を、問試みるに、
盗の口供と符合せり、よりて、それ友愛の謀を、
一、白銀若干を下賜せし、れぬ、當時、これ、岡江岡江、
まければ、此地乃富商、岩屋兵衛といふ、その、養養
ひと、己れ子や、きり、とぞ

○岐王岐女乃遺勳 岡田耕翁

伴 資芳

近江、野洲郡、江都の庄に涌水あり。江都、お村、永原、
 三邑乃、間に水道を通し、田圃を潤し、餘波敷村と
 及ぶ。是を妓王涌と呼ぶ。お村に祇王寺あり。予、四
 十餘年前、その庵ふ至りし時、守僧の由縁を語り
 し、妓王、妓女いふや、此庄乃、産に、父を江都此
 九郎時久といふ、平家乃、家士に、熊野合戦に、我
 死せし、母刀自、兩女を抱き、は里に、歸す。後に、
 清盛公、此處に、遇ひ、日、何事と、希^{ケモウ}望^ウ此、事あり
 ば、速に、來就せし、めん、と、あま、に、妾^{メカ}望^ウむ、所を、た
 どり、郷里、水に、之、く、早魃^{サウカ}の、憂あり、形を、く、此、田

圃を、潤ま、ば、謀を、な、活を、れ、とい、ひ、り、お、に、ね、い
 て、た、ま、ま、功を、興、して、永世、不朽の、涌水を、掘り、其
 利、今に、及ぶ。女乃、即、よ、い、奇な、は、ば、妓王を
 は、莊此、產土、神の、託生、し、其、生存の、日は、神此、託
 宣を、祈る、に、驗あり、り、ま、と、い、ひ、傳ふ。涌水乃、源は、
 三十丁、計、西、野洲河、より、地中を、通、して、水を、引き、
 くる、もの、な、れ、ば、な、み、く、の、エ、夫を、と、て、お、蛇を、庵、の
 ら、ば、其、代乃、平家の、勢、つら、お、る、な、ど、か、と、り、
 は、其、寺此、縁記に、志、ふ、志、なる、願、し、何、ぞ、此、軍記
 に、見、ゆ、ると、は、や、考、ね、ど、平家物語に、見、れ、ば、は

あ女を穉姓と志れざる舞妓のやうに見ゆるをげ
洗いさも有づきとなりたのれが志るおほく清水
乃澄まそくゆいげあく洛西大通寺の門前橋首
に志くものあり。

○義夫皿を碎く上回

同上

上野國此士人乃家に秘蔵の皿二十枚ありゆり是
銭破るとのありば一命を奪ふべしやせくつひ傳ふ
能るに一婢あやまらして一枚を破りりりば合家これ
ねどろき悲しむを裏に米を舂く男これを開き
付けて、己の家秘蔵ありと破きしる陶器を繼

ぐに跡も見はれず其皿を足踏つやいふに
皆色を奪して其男を呼びくみせしに二十枚
をさはねてつくばくみるふりしておちたる持
はく微塵も碎きしる人これをおあくと阿き
れたまば笑ひくつふ一枚破りしるも二十枚破
りしるも同ドク一命をめさるるなれば皆が破
りしるも主人よ作せしれよけ皿陶物なれば一々
破る期あるべし然れば二十人此命にかくふ
を敵一人此命を奪つくのふ願し繼ぐづき秘
蔵ありといひり偽みかくせんがためありとい

すもたどろろげ主人乃帰をまららるに主人
ゆきて此子細を問きて其義勇を甚く感ず城を
まうして士にたりたりとけりしがけりて
廉吏ありきとや

○西國に影さし、柞今昔 源 隆國

今も昔、近江國栗太郡に、大なる柞乃樹生ひた
りけり、其圍五百尋也、然るに其本れ高き枝を
さし、程思遣るべし、其影朝にも丹波國ふ若し、
夕にも伊勢國に差せ、霹靂する時に、動ぐれば
風吹く時と揺るべし、而る間、其國の志賀、栗太、甲賀

三郡の百姓、此木れ蔭を覆ひて日當らざる故に、
田畠を作得ず、事なり、おまに依りて、郡に
百姓等、天皇より此由を奏す、天皇即ち掃守宿禰
□等を遣して、百姓の申すに聽ひて、此樹を伐倒
して、けり、然るに其樹伐倒し、後百姓田畠を
作る、豊饒なる事を得たり、けり、彼奏し、百姓
の子孫、今に其郡にあり、昔をかくる大なる木を
人ありける、おまに希有の事ありと、おん傳へ
るとや。

國文講本第一冊

明治二十六年十月五日訂正再版印刷
同 十月八日發行

壹冊定價金廿錢

版權所

編纂者

大阪府成郡九條村大字九條番十六番屋敷

橋本光秋

同

大阪府下堺市大町東三丁目四番屋敷

小田清雄

印刷兼
發行者

大阪東區南本町四丁目五十番屋敷

森本專助

專賣所

同南區心齋橋筋壹丁目六十七番屋敷

松村九兵衛

同

同東區備後町四丁目八十五番屋敷

石井鈎三郎

大賣 捌所

尾州名古屋本町七丁目

片野東四郎

京都御幸町柳小路北へ入

藤井孫兵衛

全寺町通二條南へ入

若林茂一郎

全寺町通柳小路北へ入

梅原支店

東京京橋區南傳馬町壹丁目

吉川半七

全日本橋區村木町貳丁目七番地

林平治郎

全日本橋通壹丁目

大倉孫兵衛

全神田區裏神保町壹番地

敬業社

